

審査結果の要旨

氏名 原岡文子

本論文は、『源氏物語』の、登場人物たちの心理的葛藤をきわめて精緻に織りなしてゆく近代小説にも連なるような位相と、神話学や民俗学の知見を俟って始めて明らかにされる古代的な位相とを深く交錯させることで、物語世界が生成展開してゆくダイナミズムを、「両義的展開」という視点から解明したものである。全体は3部28篇の論から構成されるが、23篇の論からなるⅠ「『源氏物語』の人物と表現」が本論文の中心をなす。

Ⅰ - (1)「『源氏物語』正篇の人物たち」では、まず光源氏の両義的なありがたさが多面的・重層的に明らかにされる。光源氏は、古代的な「色好み」の理想を生かされて多くの女性たちと交渉をもつが、その恋の内実には満たされぬ思いと苦悩とがあり、この物語に特徴的な「いとほし」「心苦し」といった心情語の頻出に見られるように、女性たちとの交渉は常に痛みの感覚を伴っている。光源氏は天与の美質に輝く超越的な存在であるとともに、脈絡のない情念の作用に突き動かされるような、矛盾に満ちた現実の人間の不透明さをも併せもち、愛執と道心の二つの相反する志向に引き裂かれて生きることを余儀なくされる人物だとする。また紫の上についても、とりわけ印象的なその少女時代の意味について、子どもの存在のもつ「両義性」の視点から新たな証明を当てている。すなわち反秩序的な荒ぶる童子神という神話的な元型と、秩序に従属し依存する女君というごく常識的なありかたとが二つながらに示されているが、それがそのまま光源氏の大邸宅六条院の秩序に組み込まれながらも、婚姻・出産が政治と結びついていたこの時代、むしろ「不生女」であることによって、固有の反俗世を生きえた紫の上の生の基底をなしているのだとする。

「両義性」という視点を導入することで、これら主人公の複雑な存在の様態が見事に解明されており、人物論研究の上でのすぐれた成果といえる。

Ⅰ - (2)「『源氏物語』の表現」では、祭りや桜など、この物語において重要な場面を構成する諸要素について、それらが神話や民俗の深層からいかに豊かな物語生成の力を吸い上げているかを具体的に明らかにする。またⅠ - (3)「宇治十帖の人物と表現」では、主人公薫の愛執と道心とがまさに両義的に複合したありかたをもつことを示し、宇治の中の君について、彼女を「幸せ人」と見なす世間の眼と、苦悩に満ちた彼女の内面との乖離がいかに深刻なものであったかを克明に分析する。この物語の語りそのものの中に構造化されたイロニカルで複眼的な視線が、それ以前の物語を徹底的に相対化し、浮船の物語をこれ以上は進展しえない極北にまでいたらしめているその様相を明らかにする。まことに宇治十帖論の白眉ともいえるべき卓抜な把握といえる。

Ⅱ「『枕草紙』の展開」では、『枕草紙』の美意識を中心に、またⅢ「『更級日記』の展開」では、「境界」の意味を中心に、作品世界の分析をこころみている。

「両義的展開」という視点を作品分析の根幹に据えた本論文は、その方法そのものが不可避免的に孕む恣意的な思考から自由になりえない一面を一部に残しはするものの、この物語の近代小説にも連なるような位相と、神話や民俗の古層に深く依拠するような位相とを交錯させた物語生成の独自のダイナミズムを、ここまで説得的に解明した論文は以前には存在せず、その点において本論文の価値はきわめて高い。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。